

水田土地利用高度化の諸条件

— 八代平野の場合 —

川 越 義 夫

(九州農業試験場)

KAWAGOE, Y.

On Intensifying Processes of Land Uses in the Paddy Farms
of the plain of Yatsushiro

最近、九州においても一般に水田土地利用が粗放化の傾向を辿っているだけに、土地利用の高度化による水田作経営の発展方法の確立が重要な課題である。本報では、熊本県八代平野における経営事例の実態分析を通して、水利・耕地条件、作付方式、労働過程などの側面から水田土地利用高度化の諸条件について検討した。

(1) 八代平野の農業の特色は次のようである。①土壌は砂壤土が大部分を占め透水性はよい。②用水は河川を中心として冬期でも充分確保され、排水も概ね良好で施設やさい(トマト、メロン)の栽培も旺んである。③近年いぐさの作付が急増し、全国一の主産地となっている。④土地利用度が高く、土地生産性の点では全国的に最も高い農業地帯の一つである。

(2) 土地利用の高度化をはかるための第一課題は、冬期の利用率を高めることである。この場合まず問題となるのは、用排水の整備による作物の土地利用の自由度の拡大を図ることである。対象地区においては、単なる用排水の分離だけでなく内水排除にも留意し、各種の事業あるいは個別においても水系全体的立場から積極的に用排水の改良が行なわれている。また、農道整備、耕地の集団化など経営集約化への展開条件の整備も進んでいる。

(3) 農繁期労働の計画的な利用が重要である。裏作のやさい、いぐさ、飼料作などの収穫作業と水稻の田植は労働競合を生じ、作付規模の拡大に伴ってこの時期の労働ピークは顕著となる。そこで、まず稲作部門の省力化が課題となる。その一つとして、水稻の湛水直播栽培の導入がみられる。田植作業の排除による省力効果が著しいが、しかしこの水稻直播は前作がやさい、いぐさ、飼料作などの場合は、播種適期の制約から一部の面積にしか実施し難く、土地利用率が規制される。

(4) 土地利用の高度化を推進するもう一つの技術的条件として、稲作を中心とする中・大型機械など労働手段の高度化が大きく寄与している。裏作の春やさい、いぐさ、飼料作物を適期一杯在圃させ、その跡をトラクターで能率的に耕耘し、動力田植機で水稻を移植する。またコンバインで稲刈し、この時期の労働競合を緩和し、冬やさいの十分な管理を可能ならしめることによって、さらに裏作部門の作付規模拡大が行なわれる。なお、機械導入においては、経営規模あるいは経営の発展に応じて段階的に進められている点が注目される。

(5) 土地利用、労働利用、市場対応の面から地域的、集団的に完結されることが重要である。すなわち、期間借地によるいぐさ、飼料作などの作付拡大事例、またやさいの共同育苗、あるいは一定の労働力のセットによる組作業を要する作業の共同実施、機械の共同利用など、集団組織的対応が進められている。この結果、水田土地利用率は150~200%に達し、農業所得では経営耕地1.5haの農家において300万円以上を実現し、1日当たり家族労働報酬でも当該地区の日雇賃金を大幅に上回る水準にある。

(6) 以上要するに、水田土地高度利用を可能とする基本的条件として、まず用排水の完備が不可欠の条件となる。排水の整備は、水系全体として実施されなければその効果は低位に留まる。また水利・耕地の整備に際しては、地域の立地条件、農業構造、さらに生産力展開の方向に照応して行なわれることが重要である。そして、水田の自由な土地利用が保障される段階になって、土地利用、労働配分の面から機械化が課題となり、土地利用の高度化に機能する。なお、土地利用の集約化に伴う土地利用維持方式の検討が重要な課題である。